

豪華な馬具と

朝鮮半島との交流

―船原古墳―

甲斐孝司・岩橋由季

【目次】

第1章

埋納坑の発見

4

1 遺物埋納坑の発見

4

2 「とにかく凄いモノだ」

14

3 三次元計測・X線CTの活用

18

第2章

船原古墳とは

34

1 古墳消滅の危機

34

2 前方後円墳だ

35

3 古墳と埋納坑の関係

40

第3章

豪華な出土品

43

1 明らかになった埋納状況

43

2 壮麗な馬具類

51

3 みがせない武器・武具

62

第4章

船原古墳の被葬者

66

1 糟屋という地域

66

2 船原古墳前夜の糟屋地域

70

3 宗像・福津地域と船原古墳

77

4 朝鮮半島との関係

83

5 浮かびあがる被葬者像

86

第5章

船原古墳のこれから

89

参考文献

92

編集委員

勅使河原彰（代表）

小野 昭

小野 正敏

石川日出志

小澤 毅

佐々木憲一

装 幀 新谷雅宣
本文図版 松澤利絵

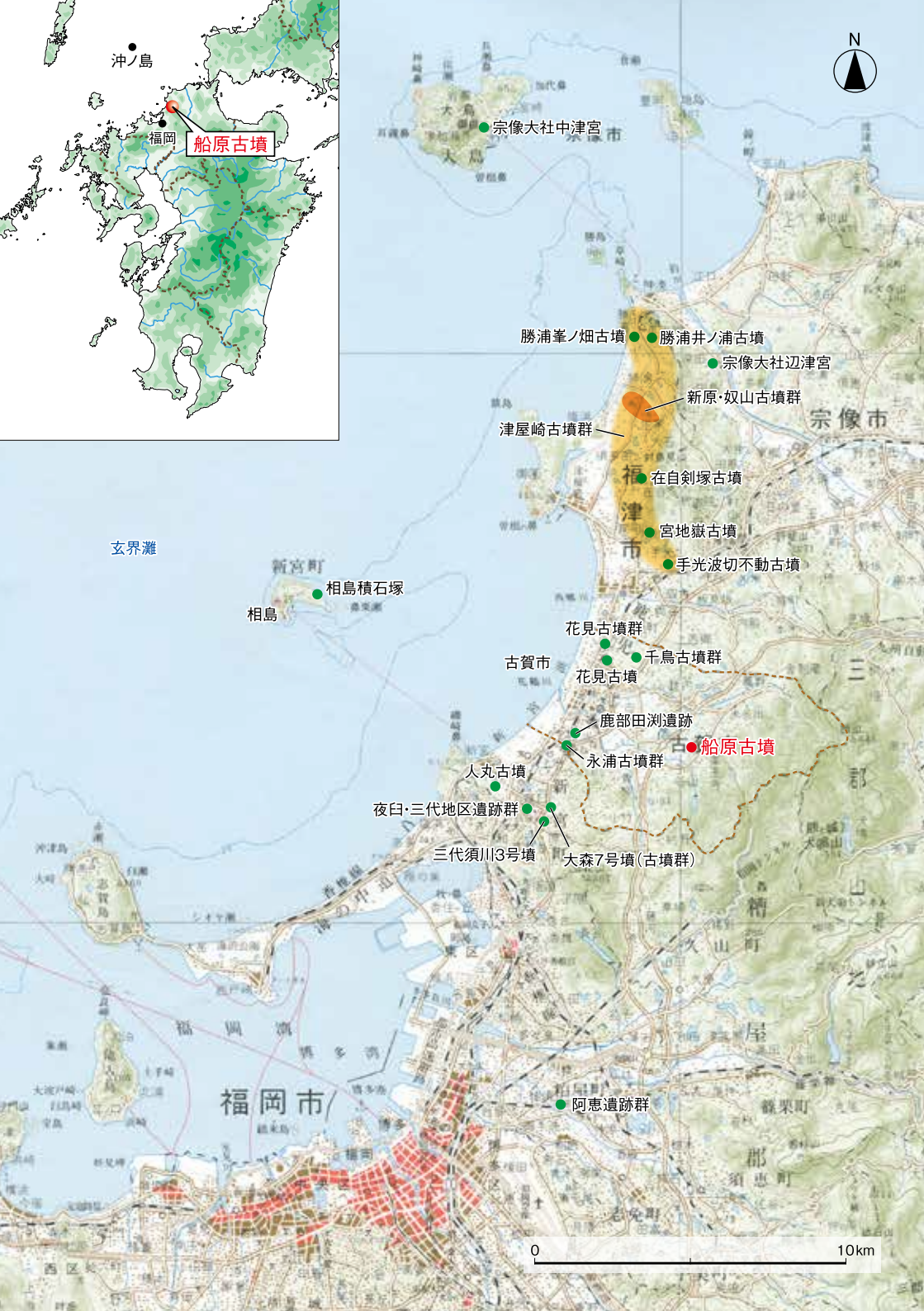
第1章 埋納坑の発見

1 遺物埋納坑の発見

ほ場整備のための記録保存

九州一の大都市、福岡県福岡市から北東に約一五キロの位置に古賀市がある(図1)。東西は一一キロ、南北は七キロ、総面積はおよそ四二平方キロ。市の北西側は玄界灘に面し砂丘と松原がひろがり、海岸線からすこし離れて鹿児島本線が通り、沿線には宅地が建ちならぶ。一方、南東側には標高四〇〇〜五〇〇メートルの犬鳴山地が連なり、北西側の海にむけていく筋かの河川が流れ扇状地を形成し、丘陵から低地となり、そして玄界灘に達する。

この古賀市の鹿児島本線ぞいの市街地から山側に二キロほどいった谷山・小山田地区の境、犬鳴山系に属する四〇九・七メートルの大目配(須葉恵山)からのびた低い丘陵上に、船原古墳はある(図2)。かつては谷山北地区遺跡群とよばれ、周囲は水田と山にかこまれた緑豊かな



◀ 図1・船原古墳と関連する遺跡の位置

古賀市は福岡県の北部にある。市の北西側は玄界灘に面し、南東側には犬鳴山地が連なる。船原古墳はこの犬鳴山地から派生した低い丘陵上にある。

調査は二〇一二年
度末の完了をめざ
して進められてい
た。そして年度末の
二〇一三年三月、調
査地内の北側にある

**調査終了間際の
発見**

に長いかたちをした
土地である(図3)。
地盤には細かい砂の
なかにさまざまな大
きさの円礫が含まれ
ていることから、河
川の堆積作用によっ
て形成された土地で
あることがわかる。



図3 ● 谷山北地区遺跡群(船原古墳)の調査区(写真左側が北)
中央にある小さな丘陵が船原古墳で、白い線のようにみえるのは発掘調査のトレンチ。発掘調査をおこなったのは、船原古墳の西側に接した南北に細長い範囲である。遺跡の大半は中近世の遺構が占める。古墳時代の遺構は船原古墳の南西にある土坑群のみ(図8参照)。

な風景がひろがって
いた。
この一帯では近年、
ほぼ整備事業が進め
られていて、谷山北
地区遺跡群も一部が
整備事業の地区にか
かり消滅することにな
った。そのため古
賀市教育委員会が、
二〇一二年一〇月か
ら記録保存のための
発掘調査をすること
になった。
発掘調査の面積は
およそ二三〇〇平方
メートル。古墳の
丘陵にそって東西



図2 ● 船原古墳周辺の景観(南西から)
海岸線から国道3号線のあいだに市街地が広がる。市域の東には大根川、西には青柳川が流れ、海岸近くで合流して花鶴川となり玄界灘へ注ぐ。山側には田園風景が広がるが、犬鳴山地が海側にせまりだすことで福岡平野と宗像地域をつなぐ回廊のような地形となる。船原古墳はその回廊をみわたす位置にあり、海岸線とはわずか4.7kmしか離れていない。

坑内の遺物の確認をつづけた。

思いがけない発見によって、予定されていた期限までに発掘調査を終えるのは不可能になった。ほ場整備事業を進める福岡農林事務所に調査期間の延長を申し入れ、大急ぎで土

坑内の遺物の確認をつづけた。

は鉄製品のようなだが、ところどころ鮮やかな金色が光ってみえる。

ていねいに土を除去すると、それらの形状が明らかになってきた。壺鐙以外にも、鞍や馬の口にかませる轡、馬具の革帯の交差するところにつける雲珠や辻金具、飾り金具の杏葉など、馬具ばかりが埋まっていたらしい(図5)。

は鉄製品のようなだが、ところどころ鮮やかな金色が光ってみえる。

ともかく、期間内に調査を終わらせなければ……。そう思いながら周辺の土を急いで掘り進めた。すると、馬具はこの壺鐙だけではなかった。土坑の下層をおおっている土を除去するにつれ、細長い土坑の底部一面に遺物がひろがっていることがわかってきた。大半



図5 ● 土坑から姿をあらわした轡や辻金具
土坑の北側、壁際的一部分に、金銅装の轡や辻金具などの金銅製品がまとまっていた。薄緑色の錆が全体を覆っているが、錆のすき間から金色の輝きがみえた。



図4 ● 土坑から姿をあらわした壺鐙
土坑の北端で見つかった一対の壺鐙。少し離れた位置にあり、床面から少し浮いた状態で見つかった。壺鐙のあいだには吊金具があり、その下にある黒い被膜状のものは漆を塗った弓。



図6・1号土坑の遺物出土状態

3次元計測データにカラー写真のデータを合成してつくった1号土坑の全景。発見当初は細長い土坑と考えていたが、その後の調査でL字状になることがわかった。土坑のほぼ全面に遺物が広がっていることがわかる。

また福岡県文化財保護課や九州歴史資料館に連絡をとり、現地での指導・協力を依頼した。いまからふりかえると、この発見がその後につづく「船原フィーバー」のはじまりだったが、当時はそれを感じる余裕もなかった。

土坑から馬具が

馬具がみつかった土坑（1号土坑）は調査区の東端にあった。北西から南東にむかって細長いかたちで、長さ五・六メートル、幅八〇センチ（図6）。近世の溝の掘削により、西側壁面の一部が失われていたもの、おおむね本来のかたちをとどめているようにみえた。馬具はおよそ八〇センチの深さから出土した。

九州歴史資料館で保存科学を担当する加藤和歳氏かずとしと小林啓氏あきら（肩書は当時、以下同）に現状を確認してもらい、四月はじめからとり上げ作業をおこなうことに決めた。その後、数日かけて徐々に土坑内の土をとり除き、どのような遺物がどのくらいの量埋まっているのか確認する作業をつづけた。その結果は驚くべきものであった。

土坑北側の隅には、一目で壺燈とわかる円錐状の鉄製品が二つ姿をみせている。そのかたわらに横たわるU字形の大きな金属製品は、ところどころに金色が顔をのぞかせていることから、金銅装の鞍と推測できた。

鞍の脇には、金銅製の辻金具が数点まとまってみえる。土をとると金色に輝き光沢がひときわ目立っている。その中央部分が丸く白くみえるのは装飾のためにつけた貝殻だろうか（図5